

個別最適な学びと協働的な学びの一体化を目指す一方策

～「比べ読み」の実践を通して～

愛媛大学教職大学院 田頭 良博

1 研究の趣旨

本研究は、個別最適な学びと協働的な学びの一体化を図るべく、「比べ読み」という視点から単元構造・授業構造を捉え直し、児童の言葉の学びが相乗的に高まっていく具体像を構築しようとするものである。具体的には、物語教材を扱った「比べ読み」を通して、単一の教材から脱して汎用性のある読みにつなげることを目指し、その効果を検証している。

なお、今回ご依頼いただいた本原稿の趣旨に鑑みると、説明的文章の事例から実践を考察するべきであることは承知しているが、執筆者及び実践研究者（共同研究者）とのこれまでの研究内容が物語文に特化しており、下記の三神教諭の実践を中心に報告することとしたのでご理解いただきたい。

2 実践研究者（共同研究者）

愛媛大学教育学部附属小学校国語部（所属学年部は令和5年度のもの）

三神 琴美 教諭（5年生担任）

幸島 恭輔 教諭（3年生担任）

岩城 聡恵 教諭（2年生担任）

3 実践の概要

（実践事例部分の引用について）

本報告の「3 実践の概要」部分については、「初等教育研究紀要第56号（愛媛大学教育学部附属小学校 刊）」の中から、報告者と附属小国語部が共同して作成したP14-27から抽出して引用している。

【事例 三神実践】

(1) 実施時期 令和5年10月～11月

(2) 対象 附属小学校5年

(3) 単元名

ファンタジーの世界に入り込む-「注文の多い料理店」と「きつねの窓」の比べ読みを通して-
(全11時間)

(4) 実践研究のねらい

○比べ読みを通して、比較して読むことの面白さを感じさせ、同じ作者や同じテーマの作品への興味関心を高めさせる。

○他者との感想交流により、自分の読みが深まっていくことを経験的に実感させる。

(5) 単元の流れ

次	展開
一	【問いづくり】・2作品を読み、感想をまとめ、共通点や相違点をまとめ、問いをつくる。
二	【課題追究】・一次の「問い（課題）」の追究。個⇄全体の往還
三	【まとめ】・作品の主題に迫る。課題に対する全体でのまとめ→個の感想の整理

(6) 各時間の流れ

(第1時)「出会い」

本学級では、「注文の多い料理店」や「大造じいさんとがん」を今までに学習してきた。二作品の学習について想起させ、共通点はないか尋ねると、子どもたちは、すぐに、どちらの作品も人間と動物とのやり取りの様子が物語の中心となっていることに気が付いた。作品の中に出てくる動物のイメージを問い返すと、今までに学習した教材を挙げながら、いろいろな意見が出された。その中でも、「人に対して悪さをする」など、よくないイメージをもっている子どもが多かった。今回の物語ではきつねが出てくることを伝え、今まで学習した教材と比較しながら読んでいこうと声を掛けると、自分たちがもっているきつねのイメージから、「注文の多い料理店」の山猫のように人間をだましたり、何か悪いことをしようとしていたりしているのではないかと予想した。しかし、初読の感想を書かせると、「今まで悪いきつねばかりだったけれど、このきつねはいいきつねだった」という感想をもった子どもが多かった(資料1)。「注文の多い料理店」のように、ファンタジーの世界に入り込むという動物以外の大きな共通点をもちながらも、店員である動物のイメージの違いに興味をもって読む姿が見られた。

(第2～5時)「追究1」

初読の感想において、「注文の多い料理店」との共通点に注目した子どもが多く、第2時と第3時では「きつねの窓」と「注文の多い料理店」の構成を確認し、改めて共通点や相違点がないか考えた。構成を確認することで、登場人物の言動や語り手の視点、色彩にも注目して考える姿が見られた(資料2)。

第4時では、小集団において、二作品の共通点と相違点について、一人一人が付箋に書いたものを出し合いながら分類した。叙述を確かめ、同じ気付きを共有し、友達との共通点である



資料2 個人での活動

主人公の仕事が、注文の多い料理店に似ていた。また、異世界に入ってしまう点も似ていると思った。きつねは母思いだった。だからこそ、主人公のことを恨んでいそう。また、注文の多い料理店とは違い、今回は不気味な演出はなかった。(きつねは、姿を見せている)主人公は、きつねの母親が死んだことをつらく思っていたのでいい人なんだと思った。なぜきつねは鉄砲を欲しかったのか疑問に思った。きつねは怪しいというイメージを持っていたけれど、今回の物語ではあまり怪しそうには見えなかったがなぜ鉄砲を欲しかったのかかわからない(もしかしたら主人公を殺すつもりだったのかも)。またなぜ主人公はあの店に行けたのかもまったくの疑問である。きつね側から誘ったのか…。

また物語の登場人物の心情やそれらの疑問をみんなと考えていきたいと思う。

資料1 個々の「問い」の例

という判断に対して疑問をもち、問い返したりする姿が見られた。また、同じ場面を取り上げていても、共通点と捉える子どもと、内容に踏み込んで考えることで相違点と捉えている子どもがいた。友達と共通点や相違点を話し合ううちに、自然と疑問点が明らかになり、みんなで考えていきたいことを整理していくことができた。

第5時では、各班で話し合ったことを全体に伝え、そのことについてさらに全体で話し合う中で解釈を深めることをねらった。班の中や全体の中で共通点と相違点で解釈がずれた点や疑問に思ったこ

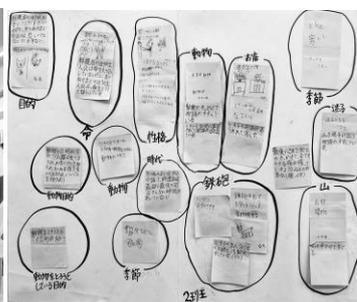
とを改めて整理していき、主題に向かうために何を話し合っていけばよいかじっくりと話し合い、問いを立てた。話し合いの結果、①「きつねは、本当にいいきつねなのか」②「どうしてきつねは鉄砲をほしがったのか」③「どうして店が現れたのか」④「きつねとの出会いで、「ぼく」は何が変わったのか」について話し合っていくことになった。

（第6～8時）「追究2」

第6時からは、話し合う順番を考え、一つずつ問いについて対話していった。ここでも「注文の多い料理店」と比較して考えさせることで、読みを深めるための手立てとした。また、一人一人が自分の考えをもつことができるよう、考えをワークシートにまとめる時間を十分に保障するとともに、自由に意見交換をする時間を作った。ワークシートには、図で書いたり、文で書いたりするなど、自分の考えを自由に表すことができるようにした（資料4）。その後、全体で意見を共有し、更に考えが深まっていくようにした。（資料3）



資料3 小集団での活動



資料4 自分の考えをまとめる

（第9・10時）「追究3」

今までの学習を振り返りながら、作品の主題（作者からのメッセージ）に迫っていった。「ぼく」の変化に影響を与えたものとして「きつね」「鉄砲」「窓」をキーワードとし、「ぼく」の変化について考えた。今までの学習を振り返り所とすると同時に、想像の振り返り所となる場所はどこか、叙述に振り返りながら全体での対話を進めた。初めは、「ぼく」は変わらなかったと考えていた子どもも、対話することを通して、「ぼく」の変化に気づき、ここでも自分の考えを再考する姿が見られた。その後、最終的な自分の考えをまとめる時間を十分に保障し、自分の読みが深まったことを感じるようにした。

主題に迫るという目的をもって対話することで、一単位時間ごとのつながりを感じながら、場面に注目して読んだり、作品全体を俯瞰したりして考える姿が見られた。それによって読みが深まり、より想像を広げながら物語に入り込んでいくことができた。

（第11時 児童の主な感想）

- ・いろいろな意見が出たけれど、「過去の思い出を引きずらない」という主題がぴったりだと思った。周りに目を向けることで、過去と向き合い、前に進むと安房直子さんは言いたかったのだと思う。（作者のメッセージに対する自分の考え）
- ・比べ読みをしながら共通点や相違点を友達と話し合い、疑問を見つけて問いを作ることができた。みんなと意見が違うこともあって、意見を出し尽くすまで話し合うことで謎を解決していくことができた。また、伏線を読むということも初めて知った。本を読むときには、伏線を気にしながら読んでみたい。（学び方）

- ・一つ目の問いを考えていると、自然と二つ目三つ目の問いとつながってきて、主題に向かうための問いがちゃんと考えられたと思った。問いを解決していくに連れて、「ぼく」やきつねの気持ちがどんどん分かってきて、最後に読み返したときには、場面の映像が頭に浮かんできて、初めよりも楽しく読むことができた。(学び方)

5 考察

(引用：「初等教育研究紀要第56号（愛媛大学教育学部附属小学校 刊）」での田頭のコメント

【三神実践】

「注文の多い料理店」と「きつねの窓」の比べ読みの実践である。私の個人的な意見であるが、学習指導要領にある「見方・考え方を育てる」ためには、「対比」という視点の積極的な導入が効果的だと考えている。物語の読みにおいても、「〇〇の物語では△△だったけど、この物語では・・・」と語ることができていくことが、「世界」を広げることはもちろん、双方の教材の深い読みにつながると考える。その際、ポイントとなるのは、「対比を行う際の視点」であるが、本実践では「共通点や相違点」が、読み取りの追究場面において、児童の方から既習教材での学習事項が意見の根拠として何度も取り上げられており、「きつねが出てくる物語」という表層的なつながりを遥かに超えて、主題性の比較検討がなされていた。強いて言えば、児童の視点が、読みの感想からの対比に留まっている面があり、たとえば教師が主導権を取る形でもいいので、文章構造（作品構成）を整理しながら、内容・表現の両面からまとめ上げていく総括へと導いていけば、より深い「経験知」として内面化していくような気がする。

【参考：幸島実践へのコメント 単元名「深い読みから自己と対話する」】

「成長」という視点をキーワードに、『モチモチの木』を読み深めていく実践である。このような抽象的テーマを掲げた読みは、ともすればその価値等に目が行きやすく、本文と遊離した意見が飛び交う授業となる恐れがある。しかし、「出会い」の段階では、教師は随所で教材の確かな読み込みを促しており、子どもたちからは、主人公豆太の言動に基づいた疑問・課題ばかりが提出されている。また、それをロイロノートで可視化することにより、共通課題へとつなげており、「追究」の過程では、子どもたちの方から「〇ページの〇〇にある通り・・・」といったような、イメージの言語化・言語のイメージ化の往還が確かになされていた。これは、言葉を通した読みが確かになされている証左といえる。今後の課題としては、「イメージ」「感想」等が拡散している際に、教材の深みのある主題性や作品価値に一気に導いていけるような、発問や活動の開発が重要となると考えた。それを検討しながら納得していくことが、「読みの経験」としてのまとまりが図られていくと思われる。

今後とも、附属小国語部との共同研究を重ね、国語力を核とした教科横断、さらには児童の言語活動の充実のための方向性を探ってまいりたい。

【引用・参考】

「初等教育研究紀要第56号（愛媛大学教育学部附属小学校 刊 2024年1月）」